

創刊号

発行
神奈川県相模原市麻溝台743番地
TEL 0427-77-1790
社会福祉法人すずらんの会
理事長 大長義信
発行日 1995年2月15日

す ズ ラ ん



»»»»»»»»»»»»»» もくじ ««««««««««

創刊に寄せて ······ 2

VOICE ······ 10~11

『すずらんの会』12年の歩み ······ 3~7

研修報告 ······ 12

委員会組織かたまる ······ 8~9

創刊に寄せて・・・

理事長 大長 義信

12年前に利用者10名の地域作業所から始まったすずらんの小さな輪が今では利用者110名の大きな輪に広がりました。南台の片隅にともった灯の下で、皆で暗中模索した日々を経て、今ではようやくこれから進むべき道が見えて来たというところでしょうか。

これ迄の間に寄せられた行政を初め地域や地元企業の方々からの暖かい支援を忘れる事は出来ません。

そして又、今日まで真摯な態度で日夜努力を重ねてきた職員の皆さんの方はもって多とすべきものでした。

しかし、まだまだこれから取り組んでいかなければならない課題はいくつも横たわっています。障害を持った人達の視点でとらえた施設の真の在り方が問われる事はこれからでしょう。規模が拡大しても、地域と共に生きることを基本姿勢として来た今までの在り方を忘ることなく、皆で力を合わせながらこれからも前進して行きましょう。

『すずらんの会』12年の歩み

～ゼロからの出発、そして積み重ね～

「どんな厳しいところでも、強く清楚に咲くすずらんのように、地域の中で美しい花を咲かせ、根付いて欲しい」という願いを込め、昭和57年10月に現在のすずらんの会の母体である「すずらんの家」を開設し、既に10余年が経ちました。この10余年は遇然にも「国連・障害者の10年」に、ほぼ歩を合わせるかのように推移してまいりましたが、毎日が試行錯誤の連続で、多くの皆様に支えられ、励まされ、時には叱咤を受けながら、糸余曲折を繰り返し微力ながらその経験を積み重ね今日に至りました。

当初10名の、今にも消えてしまいそうな小さな作業所から始まった「すずらんの会」ですが、いくつもの転換期をへ、そして乗り越えて、今では「社会福祉法人すずらんの会」として利用者・保護者・職員合わせて、200名を擁する大きな集団となりました。

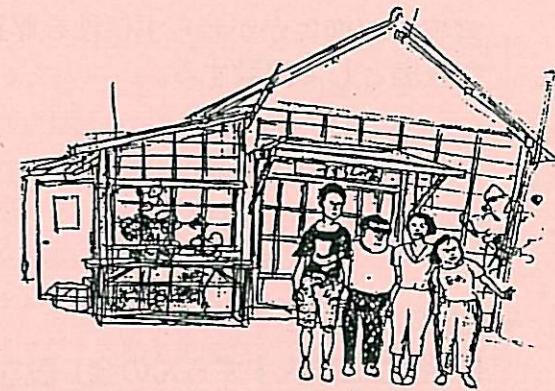
常に「一人一人の利用者のそれぞれのニーズに応じた場を提供し、その環境整備することにより、一人一人が生きがいや張り合いを持って、豊かな生活を送って欲しい」ということを念頭に置き、その根底には「過保護な援助に頼るのではなく、一人の人間として自分の生きる道を切り開いて欲しい」という願いが支えとなっています。その上で「社会に出ればもっと厳しい環境という矢面に立たされる現実のなかで、作業能力だけではなく生活面や精神面の適応力を高めていくことが社会的な自立や就労につながっていく」ものであると確信しています。

〈沿革〉

昭和57年10月

障害者地域作業所「すずらんの家」開設。

相模原市手をつなぐ親の会を母体として、障害を持っている人達の「受け入れの場」として開設する。



昭和59年3月

住友スリーエム（株）及スリーエム薬品（株）内で、「すずらんの家企业内作業班」として活動を開始。

実際に社会（企業）の中の厳しさをもって体験することにより就労への足掛かりを得していく場として開設される。

（しかし、あくまで「すずらんの家」という単一の枠内での運営であったため、経営的には大変厳しい状況だった。

平成元年4月

「すずらんの会」発足。

相模原市手をつなぐ親の会を離れ、独立独歩の道を歩き始める。

地域（企業活用型）作業所「ワークショップSUN」開設。

「（すずらんの家企业内作業班）を改組・改称し開設。」

5年間の企業内での活動が認められ、地域（企業活用型）作業所として、新たなスタートを切る。

ワークショップSUN

毎日の作業は、製造工程の最終部門の梱包作業を担っており、製品の品質管理と納期の厳守が必要とされます。4~5名の小グループで行う事で、各自の責任感、協調性が育まれます。

また、10年間の歩の中で、ますます大会等を通して社員との交流も増え、仕事を離れたところでも社会性をみがく良い場が得られています。これまでに12名の人が一般就労しました。厳しさとやさしさと充実感のある作業生活を通して、これからも就労への橋渡しをしていきたいと思います。

障害者地域作業所「くるみ作業所」開設。
障害の程度にかかわらず個性を尊重し、
育む場として開設する。



平成2年12月
「社会福祉法人すずらんの会」設立。
作業所の活動を見守ってきて下さった
地域の篤志家より土地の寄付を頂き、
あらためて今後の展開を検討し、精神
薄弱者通所授産施設設置のため法人化
に踏み切る。

平成3年8月
精神薄弱者通所授産施設「ワークショップ・
フレンド」を開設。
市内で最初の通所授産施設として開設する。
(定員40名)

ワークショップ ・フレンド

企業下請型の授産施設として、6社から仕事を
頂いています。作業を中心としたカリキュラムの
中で、安定した生活環境と安定した作業（種類と
量）を通して、社会人としての体験を重ね、自分で
選び責任を持った行動がとれるように援助しま
す。「福祉」という枠の中での甘えを極力排し、
一般社会（企業）と同様な形態で推めています。



平成4年4月
「すずらんの家」「ワークショップSUN」
「くるみ作業所」社会福祉法人すずらんの会
の傘下に入る。
運営・経営の安定や一元化、職員の身分保
証・福利厚生等を鑑み社会福祉法人すずらん
の会の傘下に入る。



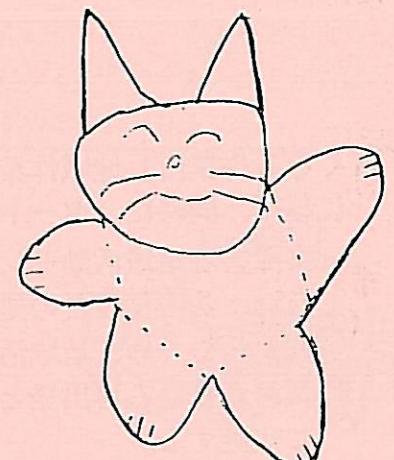
平成5年4月
「すずらんの家」地域作業所から地域活動セン
ターに移行。

県障害者地域活動センター設置運営要綱の
制定にともない、小幅ながらも法内施設との
処遇格差の是正及び運営の安定化のため
「すずらんの家」を改築及び拡張し、地域
センターに移行する。

すずらんの家

主な作業は、お菓子と手芸です。お菓子は、バ
ウンドケーキ・クッキーを中心になっていますが
手芸は、おなじみのネコ・カエルのぬいぐるみに
加えて、今年から小さくてかわいいお手玉ネコを
始めました。どの製品も売れゆきは好調です。将
来の夢は、すずらんの家のブランド「ラ・ミュ
ゲ」が、相模原市銘菓百選に選ばれるように、今
まで以上の味を追求して、みんなで力を合わせて、
毎日の仕事に遊びに一生懸命ガンバッテいきま
す。これからもすずらんのお菓子に、どんどん注
文待っています。

「ワークショップ・フレンド」の定員を増員。
養護学校卒業生をはじめとするニーズに
答えるために、定員を10名増員し50名と
する。



就労援助」開始。

地域生活支援の一環として、就労希望者への
援助や就労後のアフターケアを法人内の
各エリアの特色を活かしたシステムの元に
行う。

グループホーム「リリーハイム」開設。

従前法人としては、昼間の部分のみの展開
であったが、法人内外のナイトケアの需要
と必要性を踏まえ、開設した。

住人・・・女性5人

リリーハイム (グループホーム)

このお仕事を始めて1年近くになります。私は週
に2日で3時間ずつの短い補助の世話人です。今で
は我が子のように可愛く、時には難問・奇問に出
会い、笑ったり怒ったりお互いに勉強し、1日も早
く自立させられるよう努力しています。それには
やはり、地域住民の方々の「やさしいまなざし」
をいただけるような生活や、障害に対するより深
い理解を求めるような心がけが、とても大切なこ
とと思います。

★ ★ 住人の声 ★ ★

・リリーハイムで2年あっというまでした。や
なことがあったりしたけどあっというまでした。



平成6年4月

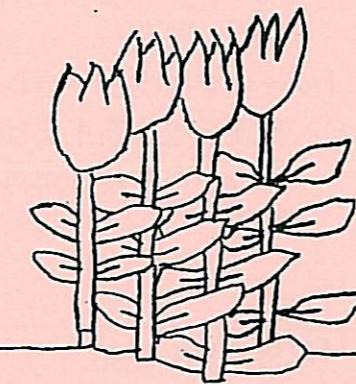
障害者地域作業所「花暖」開設。

小集団でのかかわりを大切にする作業所として開設。

花暖

下請け作業や試行錯誤中の自主製品の開拓にとゆったりとした中にも少しの緊張感を漂わせて仕事をしています。

将来は、お店をやりたいな、なんて夢ももっています。



「ワークショップ・フレンド」障害福祉施設

地域サービス推進事業（デイサービス）を開始。

法人の内外を問わず、企業からのドロップアウトの人達や養護学校卒業生などの受け皿として、施設機能を利用するため開始する。

「くるみ作業所」地域作業所から地域活動センターに移行。同時に「タートル」と改称。

県障害者地域活動センター設置運営要綱にともない、法内施設との処遇格差の是正及び運営の安定化のため、地域活動センターに移行する。又、新たなる再出発として名称も「タートル」に変更する。

タートル

「ございまっすー。元気ー」「おっ、おっ」「ナガミダさんいる?」…さあ、それぞれのユニークな挨拶が聞こえてきて、一日の始まりです。

仕事は今までと同様、自動車部品の組立と和紙製品作り（マーブリング）が主ですが、自分で考え自分で決めるという経験も増やしたいと考えています。

楽しい事が大好きなタートルは、おしゃれな建物のなかにあります。

「在宅訪問援助」開始。

施設・作業所に通えない利用者に対し、定期的な訪問やカウンセリング、保護者との面談や作業提供などの援助を開始する。



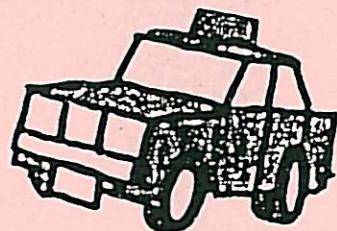
グループホーム「ワイビレッジ」開設。

リリーハイムの実績と、より多くの人達のナイトケアの必要性を踏まえ、開設する。

住人…男性3人
女性2人

ワイビレッジ (グループホーム)

「ワイビレッジ」の特徴はまず、家が新しいことです。みんなの(顔には出さないけど)しづかな期待がありました。家をみたら、期待通りでした。みなさんも、なんだかうれしそうでした。そして、家に入ってピカピカで驚きました。今日からこの家に住める、そして昔の家は一週間に一度だけとなりました。そして、少しずつきまりも月がたつと「グループホーム」らしくなって、みんなもだんだんしっかりしてきました。こうして、みんなと仲良くして楽しい生活になるように、みんなとがんばっていきたいと思います。（住人N君）



「タートル」「ワイビレッジ」「有料ボランティア」の連携による、送迎・時間外預かりサービス開始。

家庭の事情により、作業所までの送迎及び定時時間の登帰園が不可能な利用者について、保護者からの要望により「タートル」「ワイビレッジ」「有料ボランティア」が連携し、サービスを開始する。

給食サービス

すずらんの家(火曜日)とタートル(月・木曜日)では、希望者に対してフレンドの厨房で作った給食を提供しています。自分達で配膳して後かたづけまで行なっています。

平成6年7月

「タートル」給食サービス開始。

平成6年10月

「タートル」時間延長預かりサービス開始。

保護者からの要望の声を基に、当面16:00~17:00の時間延長預かりサービスを開始する。

時間延長サービス

父兄の送迎で通所している方が多いタートルでは、父兄の負担が大きく夕方の迎えの時間を心配して日中なかなか外出できないという声がありました。そこで、時間を延長して利用者を預かるというサービスを始めました。



委員会組織かたまる

～様々な援助の具体化をするために～

今年度より、法人内により一層の組織化をはかり、いくつかの委員会に分かれています。これは、法人内の7つの施設・作業所に所属する職員がエリアをこえて、全体の流れを見ながら話し合いを進めているものです。時間のやりくり等、不都合な面もありますが、「すずらんの会」を利用している人達のよりよいサービスを求めて、試行錯誤を重ねています。

【文化委員会】

「すずらんの会」の利用者(希望者)が自主的にやりたいものを探し7つのクラブに分かれて活動しています。

月2回、土曜日の午前中だけですが、余暇活動の援助の一環となればと考えています。

また、今年度より地域交流にとスポーツ大会や文化発表会を計画しています。料理・音楽・手芸・絵画・演劇・映画鑑賞・スポーツともりだくさん。ボランティアさんを365日募集しています。



【行事委員会】

今年も法人全体のクリスマスパーティーがホテル『グランドパレス相模原』で行われました。法人全体が集まって地域の方々と交流しダンスやbingoゲームと盛り上がりいました。おめかししたみんなは、輝いて見えました。

【連絡調整委員会】

4つの地域活動センターと作業所間の情報交換を行い、問題点や課題について協議し、調整しています。今年は以前より、保護者からの要望の高かった給食サービスと時間延長サービスについて検討し、ついに実現しました。



【研修委員会】

職員として、そして1人の人間として「これでいいのかな」「どうしたらいいのかな」と考えこむことは少なくありません。小さな空間で決まった日課をくり返すうちに、見えにくくなっていることもあるでしょう。

また、軌道にのっている時も、常に周りを見回す機会や余裕はもちあわせたいものです。その意味で、研修や学習会は自分や自分の知っていることを見つめ直す一つのきっかけになります。委員会では今年「施設職員としての援助サービスとは何か」を年間のテーマとして、法人内で研修を開いたり、外部からの研修の案内もしています。



【就労援助委員会】

すずらんの会を利用し、就職をめざしている人達がいます。そして現在、会社で頑張っている先輩がいます。彼等は教えてくれました。仕事だけできれば働けるのではないこと。大切なのは、挨拶や返事がきちんとできること、遅刻したり勝手に休んだりしないこと。私達は、その教えをそれぞれの作業や関わりを通して、利用者の人達に伝えていくことを大切にしています。

もう一つの目的は、働きたくても働く場が少ない現実の中で、より多い選択肢(働く場)を開拓していくことです。



【入所施設・特例子会社等プロジェクト委員会】

当委員会は、今後のすずらんの会の方向性を決定していくような推進力を持った委員会になるべく、準備中です。現在は、緊急一時預かりホームの開設、いろいろな事情で施設に通ってこれない方の為の訪問授産制度の導入や障害者の就労援助サービス雇用促進の為の特例子会社の設立に向けていく予定です。

法人の展開を客観的な立場で言葉にし、機関誌としてまとめました。私達自身もこれまで振り返り、現在をみつめ今後の流れを考える・そんなきっかけの一つになればと考えています。

今春は、最新のパンフレットを作る予定です。

【編集委員会】

去る11月12日(土)相模原総合体育館に於いて、第一回すずらんの会スポーツ大会」が行なわれました。男女に分かれ、爆笑プレーがチームはボラーチームとの交戦をおさめ得員チームと戦った男子優勝チームは大敗。利用者・ボランティア・職員それぞれの立場を越えて、お互い真剣に戦った、すがすがしさが、感じられました。



スポーツ大会しました。

わかれまし
ートボ
かれて熱戦?
続出!女子の
ンティア
流戦でも勝
意満面。職

楽しい
ボーラーを取るのが面白かった
他の作業所の人とチームをくみ交流ができた
学校で時々やっています。あまり分からないこと
もあったけど、よく勉強になりました。
自己紹介の時恥ずかしかった。楽しかった。
ボランティア 広部利恵さん(小3)



みんなの声に耳を傾けて 必要な援助サービスを探る。

質問項目

- 1 休日の過ごし方
- 2 将来の夢
- 3 何か一言

1 しゅうをする。
横浜ラボールに行く。
みんなと話をしたりボウリング
をする。
2 友達と暮らしたい。
自分で洗濯したり、ご飯を作りたい。
コンピューターをいかした仕事をし
たいけど車イスで働く会社が少ない。
3 今のところはなし。 小寺



1 休日は1人で根岸の方にでかける。
東急ストア 中華街 プール

2 横浜市営バス交通局保土ヶ谷営業所
で事務の仕事をしたい。

3 あまり好きじゃない人もいる。
根本

1 お父さんとジョギングしたり
キャッチボールする。
3 仕事がしたい。 橋内

1 お手伝いをする。(洗濯・風呂掃除)
2 一人で暮らしたい。
アイドルになりたい。美人OLになりたい。
清水

1 カセットを聞いている。
2 3年間位フレンドに行ってからそれから
七沢に行ってそれから結婚したい。
子供を産みたい。 栗山

1 家に帰る。小鳥と遊ぶ。
本を読む。図書館へ通う。

2 健康になること。
休みなく、毎日すずらんに通える
ように。
3 自分のできることは手を出さずに
見てほしい。 後藤



図書館

1 ずっとテレビ見てる。
お母さんに本とケンタッキーを
買ってきてもらう。
CDを聞きながら踊る。



2 CDがほしい。
ポテト・唐揚げいっぱい食べたい。
3 タートルが好き。みんなが好き。

美穂

VOICE

～みんなの声～

根岸 インタビュー



1 お母さんと一緒に買い物
食べ物とか洋服を買う
お昼寝
2 雪だるまになりたかったけど
とけちゃうから…
警察病院の看護婦になりたい
テレビ見て白衣が好きだった
彼はコーヒー会社につとめている
3 自分の部屋にクーラーをつけて
ほしい
1号棟でお風呂に入れるといい

佐々木

<ボランティアさんより>

サッカーで知り合った先輩が施設の
職員で、誘われて毎回楽しく参加させて
いただいてます。スポーツで汗を流すこと
は、知らない人とでもすぐに友達にな
れます。これからも時間があいている時
は、どんどん参加していきたいと思って
います。

鎌田 和明
横浜市緑区在住



施設での援助サービスの在り方とは

職員 早田 栄

10月29日のすずらんの会法人内研修において、社会福祉法人よろべ会沼代園施設長星野泰啓さんの講演「施設職員の援助サービスの在り方」を聞かせて頂いた。講演の内容は、現代の社会福祉の体系のほとんどが1920年～1930年に形作られてきたものであり、社会の動きや意識の変動を背景とし、今大きな転換期をむかえている。その中で福祉施設は「新しい役割」を求められており、職員には「新しい施設作り」のための自己改革が求められている。その求められているのは何か。

1)垂直型福祉から水平型福祉へ

これまでの福祉とは与える側と与えられる側の関係であったが、誰でもが対象者であり（社会問題としてとらえる観点）支えあう関係を作っていく。

2)施設福祉から地域福祉へ

従来、施設体系の延長線上の展開であり、選択肢も在宅か施設かの限られたものであったが、権利擁護の意識の高まりなどを背景とし地域で生きるためのニーズに合わせた多くの選択肢が求められている。

また、集団サービスから個別サービスへの変化の中で施設の自己完結（施設はオールマイティではない）ではなく、施設を機能としてとらえ地域福祉に役立てていく。

3)自立概念の変化

るべき姿を目指す姿が自立であり、人間の生き方の問題としてとらえていく。

4)インフォームドコンセプト(本人参加)

人生の中では何度かの選択を迫られる場面があり、その時に本人ではなく、本人を取り巻く人々がよかれと思い選択することがほとんどで（もちろん判断の能力は枠外視できない）あり、本人に対しての十分な説明、わかってもらう努力ができているかを問直し自己決定権を尊重していく。以上、歴史の流れからとらえた4つのキーワードとして確認された。

この講演を聞き、4つのキーワードに共通してみることができるのは、人権の尊重が基盤となっていることであり、当たり前であるはずの一人の人間として認めていく事が残念ながら当たり前となっていない「今」その阻害要因として、福祉施策が問われ施設の在り方が問われ、日々かかわる職員の資質が

問われているのだと思う。

17年前、私は、高校の同和討論集会の資料作りにてA国立病院内にある重症心身障害児病棟を訪れた。その時に、ベットに横たわり外界からの刺激に全く反応しないうつろな表情でただ息をしているだけの人を目にしたとき、人はみんな平等と考えていた、解っていたはずなのに…。

「何なんだろう。何のために生きているのだろう。生きていることに意味があるの。」と強いショックを受け人間って何。生きるってどういうこと。繰り返し問い合わせ混乱を覚えた。病棟で働く指導員の方が「あなたと同じ人間です。同じ命を持って生まれてきたのだから…。ゆっくりとした発達ではあるけれども成長しているのですよ。」と話してくれた。そして3年後養護学校への実習で再び病院を訪れた時表情のなかった子供が笑顔でむかえてくれた。そこには、本人の持っている可能性ともてる能力を最大限に生かそうと正面から取り組んでいる職員の姿があったのです。私は、このときのショックを原点とし福祉に関わる道を歩んできた。（途中脱線もし、多くの失敗もしてきたが…）そして今、通所の授産施設に働き命の大しさを見つめ直し、利用者一人一人の夢を実現する援助者として本当に求める人の側に立った取り組みがされているのかを省みる必要があるのだと思う。

利用者が作業を通して自立していく力を獲得できるように援助することを施設の役割とするならば、そこに働く私達は仕事をさせることを目的とするのではなく、本人の持つ能力を最大限に引き出す職能開発、そして主体的な暮らしを展開する基盤となる就労その援助、得た収入や工賃をどう活用していくのか生活への支援（これには家庭との連携が必要）について工夫し取り組んでいくことが必要だと思う。そのためには、施設長をはじめとし気付き合い点検しあう職員集団でありたいと思い、利用者のニーズに合わせた対応ができる力量を身に付けていかなければと思います。

編集後記

原稿を多数いただきましたが載せきれず、おあとは次号へと見切発車します。関係各位にTHAMKS（一字誤植？いーえ幸強付会です）

